

地域社会におけるスポーツクラブの社会的機能  
— コミュニティ活動とコミュニティ意識を中心として —

A Study on the Social Function of  
Community Sports Groups  
— A consideration of the effects of  
sports group type participation for  
increasing community consciousness —

中島豊雄\*<sup>1</sup> 川西正志\*<sup>2</sup> 鈴木文明\*<sup>1</sup>

Toyoo NAKASHIMA\*<sup>1</sup>, Masashi KAWANISHI\*<sup>2</sup> and Fumiaki SUZUKI\*<sup>1</sup>

The purpose of this study was to determine the social function of community sports.

The first hypothesis was that the community sports groups promote community consciousness.

The second hypothesis was that A-type sports groups promote community consciousness more than B and C-type sports groups: A-type (membership is composed of neighbors), B-type (membership is drawn from a city-wide area), and C-type (membership is based on business establishment).

The subjects of this investigation were 121 groups participating in softball and softbaseball teams. The total amount of participants studied were 1393 men, aged 20 to 55, and living in Ichinomiya-city, and industrial city with a population of 255,008 (1982.2.1.).

The results of this study suggest that certain type sports group participation increases in community activities on local and regional levels.

1. After joining a sports group, participants increased their frequency of participation in local and regional community activities.
2. After joining a sports group, the members increased their social interaction with residential neighbors.
3. A-type sports groups performed more duties as a group in local and regional activities than other types, B or C.
4. The individual member of A-type had more frequent participation than member B and C-type in local and regional community activities.
5. The members of A-type had higher levels of community morale than B and C-types.

緒 言

昭和30年代以降、産業化、都市化の急激な進行にともなって、地域社会は都市、農村を問わず大きく変貌し、高度経済成長期を経て、旧来の伝統的住民層によって構成されていた地域共同体は崩壊し、そこでは多くの地域無関心層が生まれ、住民の連帯感が薄れ、人びとは孤独感に陥った状況がみられた。

昭和44年9月、国民生活審議会コミュニティ

問題小委員会が「コミュニティ—生活の場における人間性の回復」<sup>1)</sup>という報告書を発表して以来、都市においても農村においても住民の手による新たな地域づくり、町づくりが模索されるようになった。人びとは、それまでの社会で見失われがちであった「人間優先の生活」の確立に目を向けはじめ、物質的なものから精神的、人間的な心の豊かさを求めるようになった。これは「量」から「質」への価値観の転換を意味するものであつ

\*<sup>1</sup> 名古屋大学      \*<sup>2</sup> 中京大学

\*<sup>1</sup> Nagoya University      \*<sup>2</sup> Chukyo University

た。

このような状況のなかで、1973年の経済企画庁編「経済社会基本計画—活力ある福祉社会のために」<sup>2)</sup>が述べているように、スポーツ活動は「地域住民相互の接触を深め、新しい時代に合致したコミュニティ活動の場の形成に貢献する」ことが期待されたのであった。また、翌年発表された「コミュニティ・スポーツ施設整備基本計画報告書」<sup>3)</sup>のなかでは、コミュニティ・スポーツが契機となって地域社会の形成や連帯感が高まり、それは「住民自身の生き生きとしたまちづくりを目指すムーブメントにまで高められる配慮が必要であり、健康で明るく楽しいまちづくりを目指すムーブメントのなかからさまざまな自発的なグループやボランティアが登場し、スポーツ活動と連帯の輪を住民全体に広げ」、「福祉の拡大と人間性の回復を生活環境全体におし広げていく契機ともなる」と期待されたのであった。

これを受けて、全国各地でスポーツによるコミュニティづくりの実践が試みられてきているが、その場合、とくに居住地を基盤としたスポーツクラブが地域において果す役割はきわめて大きい。たとえば、スポーツクラブが町内に結成されたことによって町内会や自治会への男たちの出席が多くなったとか、また祭りや盆踊大会などの地域行事をスポーツクラブの人たちが中心になって運営するようになったとかの事例が各地で見られ、地域のスポーツクラブがコミュニティ活動に関与する範囲が次第に広がる状況がみられる。

そこで本研究では、居住地を基盤としたスポーツクラブの育成に成果をあげている愛知県I市の事例をとりあげ、地域社会の中核的担い手である男子壮年層によって構成されているスポーツクラブがコミュニティ形成にどのような役割を果たしているかを究明した。

## 目 的

松原治郎は、コミュニティをコミュニティたらしめる要件として、領域性、社会的相互作用、社会的資源、コミュニティ感情の4つをあげている<sup>4)</sup>。地域社会におけるスポーツクラブがコミュニ

ティ形成の役割を担うものとして期待されるとすれば、スポーツクラブはこれらの4要件を充足するものでなくてはならない。スポーツクラブがこれらの4要件をどのように具備しているのか、また、それらの要件が相互にどう関連し合っているかを明らかにすることによって、スポーツクラブのコミュニティ形成機能の究明が可能になると考えられる。すなわち、スポーツクラブが、これらの4要件をどのように満足させているのかを相互関連的に解明することによって、スポーツクラブのコミュニティ形成に果す役割を構造的に把握できるのである。

スポーツクラブはある一定の範囲内で行われる地域住民の相互作用の一つの形態である。スポーツクラブ加入が契機になって、人びとは地域社会のなかで展開されるスポーツ活動を通して、自らの相互作用を増大させ、クラブ仲間や地域住民との交流を深め、地域への愛着や関心などのコミュニティ感情が喚起されるものと考えられる。この点について、海老原修は上田市のコミュニティ・スポーツの実証的研究を行い、「コミュニティをコミュニティたらしめる要件の2つであるところの社会的相互作用性とコミュニティ感情に対して、コミュニティ・スポーツへの参加が、一つの契機となり、近隣交流を密にすると同時に、他の社会的事業への積極的参加を促進、強化していると考えられる。すなわち、コミュニティ・スポーツはコミュニティ形成の一翼を担うことが可能である」<sup>5)</sup>と述べている。海老原の研究は、地域社会のスポーツをコミュニティ形成の観点から追求した数少ない研究のひとつであり、本研究が地域社会におけるスポーツクラブのコミュニティ形成機能を検討する場合にも重要な示唆を与えるものである。

また、スポーツ活動は一定の範囲内で行われることから、スポーツクラブのコミュニティ形成に果す役割を論議するとき、クラブ派生基盤(領域性)が重要な意味をもつことになる。たとえば、近隣の人たちでつくられたクラブは、居住地が広範囲に分散している人たちでつくられたクラブや職域を基盤としたクラブと比較して、コミュニ

ティへのかかわり方が、当然異なってくると思われる。そこで、本研究ではこの点に着目して、領域性の相違がスポーツクラブ員や地域住民の社会的相互作用とコミュニティ感情にどう関与しているかを究明することによって、スポーツクラブがコミュニティ形成に果たす役割を検討した。

具体的には、次の2点を明らかにすることを研究の目的とした。

- (1) スポーツクラブがコミュニティ形成にどのような役割を果たしているかを明らかにすること。
- (2) 領域性が異なることによって、スポーツクラブのコミュニティ形成機能にどのような相違がみられるかを明らかにすること。すなわち、領域性がスポーツクラブのコミュニティ形成にどのように関与しているかを把握することである。

## 方 法

### 1 対象の選定

I市は人口約25万強の毛織物を中心とした繊維産業都市で、愛知県西北部に位置している。I市は昭和40年代後半期から地域スポーツクラブの育成にめざましい成果をあげ、現在(昭和56年4月)市内には十数種目、1060クラブが結成されている。これらのクラブの構成は、いずれも町内単位や小学校区単位という小生活圏域を基盤としており、居住地を中心とした地域連帯づくりにより大きな役割を果たしている。とくに、男子ソフトボールクラブは全市域に590クラブがあり、それらのクラブの大部分は町内単位で構成されており、ほとんどの町内には1つ以上のクラブが結成されている。こうしたソフトボールクラブが市全域につくられるようになった契機は、昭和48年の全市ソフトボール大会の開催であった。当時、チーム編成は年齢30歳以上であること、40歳以上の4名を含むこと、さらに町内単位であること、但し小さい町内は隣接する町内を合併することができるが、当該小学校区運動会の町内(通称通学団)リレーの範囲内を最大限とするなどの制限条件が設けられていた。発足当時、昭和48年のクラブ数は213であったが、昭和52年349クラブ、昭和54年505クラブ、昭和56年590クラブに急増し

た。現在は16連区(地区)すべてに男子ソフトボール部がつくられ、各連区が独自の大会や行事を開催している。また、これらのクラブ構成員の大部分は30代、40代の男子壮年層であって、地域生活と密着したかたちでクラブが成立しているのが特徴である。

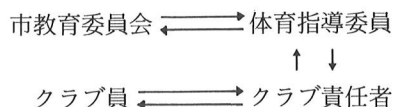
以上の理由から、本研究ではI市の男子ソフトボールクラブを調査対象に選定した。本調査の対象クラブの決定は、全市16連区から、地域的特性を考慮し4連区を抽出し、当該連区のソフトボールクラブの全部を調査対象とした。このタイプのクラブを近隣型クラブ(居住地が近接した人たちで構成されたクラブ)と名づけることにした。また、比較対照群として広域型(クラブ員の居住地が広範囲に分散しているクラブ、このタイプに該当するソフトボールクラブが少数であったので、ソフトボールクラブに性格が類似している軟式野球クラブを調査の対象とした)と職域型クラブ(職域を基盤としたクラブ)を調査した。

表1 調査対象

	対 象 数		有効回答数		有効回答率	
	クラブ	クラブ員	クラブ	クラブ員	クラブ	クラブ員
近隣型	108	1,398	87	1,038	80.6%	74.3%
広域型	30	316	18	178	60.0%	56.3%
職域型	27	309	16	177	59.3%	57.2%
計	165	2,023	121	1,393	73.3%	68.9%

### 2 方法

質問紙法を用い、集団調査(クラブ用)と個人調査(クラブ員用)の2種類の調査を実施した。調査票の配布、回収は次の手順で行った。



### 3 調査の時期

昭和57年2月~3月

### 4 分析の視点と方法

研究目的を究明するために、クラブ派生基盤(領域)の特性から、クラブタイプを前述の近隣型、広域型、職域型の3つに分け、作業仮説として①スポーツクラブはコミュニティ形成の役割を果たす ②近隣型は広域型、職域型よりもコミュニティ形成に強く機能するの2つを設定した。したがって、分析の視点としてスポーツクラブの領域性がスポーツクラブ員や地域住民の社会的相互作用とコミュニティ感情にどのように関与しているかを検証することとした。なお、4つのコミュニティ要件の内容は次のようである。

領域性：クラブ派生基盤の特性から近隣型、広域型、職域型の3つに分類した。

社会的相互作用：近隣交流とコミュニティ活動への参加の2つを社会的相互作用の内容とした。

コミュニティ感情：コミュニティ感情をコミュニティ意識の一部として考え、鈴木広のコミュニティ・モラルとコミュニティ・ノルムの概念を用いた<sup>6)</sup>。

社会的資源：運動施設（I市の各クラブの運動施設の利用条件、たとえば施設確保の困難性などはほぼ同一であったので本稿では変数として取り扱わなかった。）

データは百分率で示したが、クラブタイプ間の有意差検定はカイ自乗検定で行い、危険率5%水準以下のものについては、その関連度の強弱をみるために、クラマーの関連係数を算出した。※※は1%水準の危険率を表わし、※は5%を表わ

す。なお、調査結果の統計的処理は名古屋大学大型計算機センター FACOM230—60/75 を利用した。

### 結果と考察

#### 1 クラブの基本的特性

スポーツクラブがコミュニティ形成にどう関係しているかの検討に入る前に、調査対象のスポーツクラブの基本的特性を簡単に述べておく。

##### (1) クラブの集団的特性

表2はクラブの集団的特性をクラブタイプ別に、存続年数、人数構成、活動目的、活動日数、競技レベルの5つの側面からみたものである。クラブの存続年数をみると、近隣型では「3年以内」が6.9%ときわめて少なく、「7~9年」39.1%、「4~6年」19.5%が多く、結局4年以上存続しているクラブが9割を超えている。これに対して広域型、職域型は「3年以内」がそれぞれ27.8%、12.5%と存続年数の短いクラブがやや多くなっている。人数構成をみると、近隣型では「10~20人未満」が62.1%と半数を超えており、「20~30人未満」が24.1%、「30人以上」が13.8%である。これに対して、広域型、職域型は「10~20人未満」がそれぞれ77.8%、68.8%となっており、少人数のクラブがやや多い。活動目的についてみると、3タイプ間にほとんど差異がなく、全体では「楽しみ志向」の58.7%が最も高く、次に「健康志向」の38.8%、「勝利志向」の2.5%である。活動日

表2 クラブの集団的特性

%

	1. 存続年数				2. 人数構成			3. 活動目的			4. 活動日数					5. 競技レベル			
	3年以内	4~6年以内	7~9年以内	10年以上	10~20人未満	20~30人未満	30人以上	勝利志向	健康志向	楽しみ志向	年1~5回	年6~11回	月1回	月2回	月3回	週1回以上	クラブ内	市内の1地区	市レベル
A. 近隣型 N=87	6.9	19.5	39.1	33.3	62.1	24.1	13.8	1.1	40.2	58.6	3.4	8.0	1.1	32.2	26.4	28.6	5.7	55.2	39.1
B. 広域型 N=18	27.8	11.1	22.2	38.9	77.8	22.0	0.0	11.1	33.3	55.6	11.1	27.8	16.7	11.1	16.7	16.7	0.0	11.1	88.9
C. 職域型 N=16	12.5	18.8	50.0	18.8	68.8	18.8	12.5	0.0	37.5	62.5	6.3	18.8	6.3	31.3	25.0	12.5	0.0	0.0	100.0
計 N=121	10.7	18.2	38.0	32.2	65.3	23.1	11.5	2.5	38.8	58.7	5.0	12.4	4.1	28.9	24.8	24.8	2.5	43.8	53.7

注1. 表中N A, D Kを除いてあるので、100にならないものがある (以下同じ)

数についてみると、近隣型では大部分が月2回以上(87.2%)であるのに対して、広域型、職域型ではそれぞれ44.5%, 68.5%と少なくなっている。競技レベル、すなわちクラブが目標にしている大会のレベルについてみると、近隣型では「市レベル」が39.1%, 「市内の一地区レベル」が55.2%となっていて、「市内の一地区レベル」の方がやや多いが、これに対して広域型、職域型では「市レベル」がそれぞれ88.9%, 100%と多くなっている。以上クラブの集団特性からみた近隣型の特徴は、存続年数がやや長く、活動日数がやや多く、目標にする大会のレベルはやや低いということになる。

(2) クラブ員の特性

表3はクラブ員の特性をクラブタイプ別に年齢、学歴、職業、居住年数、住居形態の5側面からみたものである。年齢をみると近隣型では30代が44.5%, 40代が41.6%で両者を合わせると86.1%となり、大部分が30代と40代である。これに対して広域型、職域型では30代の構成比は近隣型とほぼ同率であるが、20代(広域型46%, 職域型43.5%)が多く、40代(広域型13.5%, 職域型9.6%)が少なく、若年者の割合が高くなっている。学歴をみると高校卒は3タイプとも

50%強であるが、中学卒は近隣型31.5%, 広域型22.5%, 職域型15.3%の順になっており、近隣型の学歴がやや低くなっている。職業をみると、近隣型、広域型はほぼ同じ傾向であり、「技能的労務的職業」(前者27.9%, 後者24.7%)が最も多く、次に「商工サービス業」(同24.3%, 同26.4%)である。これに対して、職域型では「技能的労務的職業」22%, 「事務的職業」16.9%, 「商工サービス業」14.1%となっており、事務的職業が多く、商工サービス業が少なくなっている。居住年数をみると、3タイプともほぼ同じ傾向にあり、全体では「生まれてからずっと」が31.6%, 「10年以上」が33.7%, 「5~9年」が20%, 「5年未満」が13.9%である。また、住居形態をみると、「持家」は近隣型がやや多くなっている。以上のことから、近隣型のクラブ員の特徴は、年齢では20代が少なく、40代が多く、学歴はやや低く、職業では商工サービス業が比較的多く、住居形態では持家がやや多いといえる。

では、このような基本的特性をそなえた各クラブタイプがコミュニティ形成にどのようにかかわっているかを、以下コミュニティ活動とコミュニティ意識の2つの側面から検討してみよう。

表3 クラブ員の特性

	1. 年 令				2. 学 歴					3. 職 業										4. 居 住 年 数				5. 住居形態			
	30才未満	30代	40代	50代以上	旧制 高小	新制 中(高)女 学(校)	旧制 高(高)校	短大・ 専門学 校	新制 大・学	その他	商工 サー ビス 業	の 手 伝 い	の 経 営 者 事 業	農 家 や 個 人 業 者	体 の 経 営 者 や 入 団 員	上 の 会 社 員 10 人 以 上	管 理 的 職 業	工 技 術 的 職 業	事 務 的 職 業	販 売 的 職 業	労 務 能 的 職 業	その他	5年未満	5~9年	10年以上	ず つ と ま ら ず で い る	持 家 (分 譲 マ ン ション ・ パ ー ト を 含 む)
A.近隣型 N=1038	11.1	44.5	41.6	2.8	31.5	53.2	12.5	2.6	24.3	4.1	5.1	8.3	6.5	11.3	7.0	27.9	5.3	11.9	21.4	34.1	31.8	82.4	16.8				
B.広域型 N=178	46.0	39.3	13.5	1.1	22.5	53.9	15.7	7.4	26.4	1.7	3.9	2.2	7.9	9.0	16.3	24.7	6.2	19.2	15.2	35.4	29.8	58.4	40.5				
C.職域型 N=177	43.5	46.3	9.6	0.6	15.3	50.8	25.4	8.4	14.1	0.0	1.7	6.2	14.7	16.9	10.7	22.0	10.7	20.9	16.4	29.4	32.2	70.6	28.8				
計 N=1393	19.7	44.1	34.0	2.3	28.3	53.0	14.5	3.9	22.5	3.3	4.5	7.3	7.7	11.7	8.7	26.8	6.2	13.9	20.0	33.7	31.6	77.8	21.4				

2 コミュニティ活動

(1) クラブのコミュニティ活動

一般にスポーツクラブは閉鎖的、利己的な集団で、地域の社会的活動に関心であるといわれるが、では本調査のスポーツクラブは地域のコミュニティ活動にどのように関与しているのであろう

か。地域には多様なコミュニティ活動があるが、本調査では、①地域スポーツ行事 ②地域祭典行事 ③青少年の育成事業 ④奉仕活動の4つの代表的なコミュニティ活動に対して、クラブとしての協力経験の有無を設問した。表4はその結果をクラブタイプ別に示したものである。

〔地域スポーツ行事への協力〕

スポーツ大会、運動会などの地域スポーツ行事に協力したことが「ある」と回答したクラブは全体の78.5%であり、それをクラブタイプ別にみると、近隣型では95.4%、広域型では33.3%、職域型では37.5%であり、近隣型の数値が顕著に高かった。これに対して、広域型、職域型では地域スポーツ行事に対して、「協力するつもりはない」と非協力的な回答をしたクラブがそれぞれ16.7%、31.3%であった。クラブタイプ間に有意差があり、クramer関連係数が大きな数値であることから、近隣型は広域型、職域型よりも地域スポーツ行事に積極的・協力的であるといえる。

〔地域祭典行事への協力〕

祭り・盆踊大会などの地域祭典行事に協力したことが「ある」と回答したクラブは全体の57.0%であり、それをクラブタイプ別にみると、近隣型では72.4%であるのに対して、広域型では27.8%、職域型では6.3%にすぎない。地域スポーツ行事の場合と同様、近隣型の数値が顕著に高い。これに対して広域型、職域型では「協力するつもりはない」と非協力的な回答をしたクラブがそれ

ぞれ38.9%、37.5%と多くなっている。クラブタイプ間に有意差があり、クramer関連係数が大きな数値であることから、近隣型は広域型、職域型よりも地域祭典行事に積極的・協力的であるといえる。

〔青少年の育成事業への協力〕

子ども会のスポーツ指導などの青少年の育成事業に協力したことが「ある」と回答したクラブは全体の54.5%である。それをクラブタイプ別にみると、近隣型では69.0%、広域型では27.8%、職域型では6.3%であり、近隣型の数値が顕著に高い。クラブタイプ間に有意差があり、クramer関連係数が大きな数値であることから、近隣型は広域型、職域型よりも青少年の育成事業に積極的・協力的であるといえる。

〔奉仕活動への協力〕

清掃、廃品回収などの奉仕活動に協力したことが「ある」と回答したクラブは全体の22.3%であり、それをクラブタイプ別にみると、近隣型では29.9%、広域型では5.6%、職域型では皆無である。奉仕活動に協力したクラブは他のコミュニティ活動の場合に比較して非常に少ない。これは

表4 クラブのコミュニティ活動

%

	1.地域スポーツ行事			2.地域祭典行事			3.青少年の育成行事			4.奉仕活動			5.スポーツ施設の整備		
	ある	い ない	協 力 し た い は 思 っ て い る が ま だ 実 際 に は や っ て い ない	こ れ ま で も な か っ た し 、 い ま の と こ ろ 協 力 す る つ も り は な い	ある	い ない	協 力 し た い は 思 っ て い る が ま だ 実 際 に は や っ て い ない	こ れ ま で も な か っ た し 、 い ま の と こ ろ 協 力 す る つ も り は な い	ある	い ない	協 力 し た い は 思 っ て い る が ま だ 実 際 に は や っ て い ない	こ れ ま で も な か っ た し 、 い ま の と こ ろ 協 力 す る つ も り は な い	ある	い ない	協 力 し た い は 思 っ て い る が ま だ 実 際 に は や っ て い ない
A. 近隣型 N=87	95.4	3.4	0.0	72.4	17.2	9.2	69.0	25.3	4.6	29.9	48.3	20.7	27.6	55.2	16.1
B. 広域型 N=18	33.3	50.0	16.7	27.8	33.3	38.9	27.8	50.0	22.2	5.6	50.0	44.4	0.0	88.9	5.6
C. 職域型 N=16	37.5	31.3	31.3	6.3	56.3	37.5	6.3	68.8	25.0	0.0	62.5	37.5	0.0	56.3	43.8
計 N=121	78.5	14.0	6.6	57.0	24.8	17.4	54.5	34.7	9.9	22.3	50.4	26.4	19.8	60.3	18.2

※※√Cr=0.71011

※※√Cr=0.61426

※※√Cr=0.59481

※※√Cr=0.47848

※※√Cr=0.53769

奉仕活動がスポーツ活動とは直接関係のない領域のコミュニティ活動であるためであろう。しかし、近隣型の約3分の1のクラブが協力したことがあると回答していることは注目される。クラブタイプ間に有意差があることから、近隣型は広域型、職域型よりも協力的であるといえる。

〔スポーツ施設整備への協力〕

スポーツの広場づくりとか空地の整備など地域社会におけるスポーツ条件の整備のためになんらの協力や活動を実際にやったことが「ある」と回答したクラブは、近隣型では27.6%であったが、広域型、職域型では皆無であった。

以上、地域社会における諸種のコミュニティ活動の中から代表的な4つの行事をえらびそれへの協力という点から、クラブのコミュニティ活動を把握した。その結果、スポーツクラブが最も協力したコミュニティ活動は、地域スポーツ行事であり、次に地域祭典行事、青少年の育成事業、奉仕活動の順であった。また、クラブタイプ別では、近隣型が広域型、職域型よりもすべてのコミュニ

ティ活動に対して顕著に協力的であり、その活動領域が自分たちのスポーツ活動だけにとどまるのではなく、他のコミュニティ活動への協力というかたちで、コミュニティ形成にかかわっていた。とくに、近隣型の3割近いクラブがスポーツの広場づくりとか空地整備などの具体的なスポーツ条件の改善活動に直接参加していたのが注目される。

(2) クラブ員のコミュニティ活動

① 近隣交流

クラブ活動がクラブ員相互の親交を深めることはいうまでもない。クラブが近所の人たちで構成されている場合には、近隣の人たちとのつきあいや交際は広がり、地域生活は豊かになるであろう。次にスポーツクラブ加入後におけるクラブ員の近隣関係の変化をみると表5—①に示すとおりである。これによると、クラブ加入後近所の人たちとのつきあいや交際範囲が「広がった」「やや広がった」と「非常に広がった」を合わせたもの、(以下同じ)とするものは近隣型では89.2%、広

表5 クラブ員のコミュニティ活動

%

	① 近 隣 交 流			② コ ミ ュ ニ テ イ 活 動																	
	1. 近所の人たちとのつきあいや交際範囲が広がりましたか。			2. 近所の人たちとの交際が深まりましたか。			3. (町内会の会合) 町内会・自治会の会合(寄合、常会)に出席することが多くなりましたか。			4. (地域スポーツ行事) 地域(町内や地区)の体育祭・運動会・スポーツ大会などの地域スポーツ行事に参加することが多くなりましたか。			5. (地域祭典行事) 祭礼や盆踊りなどの地域祭典・レクリエーション行事に参加することが多くなりましたか。			6. (青少年の育成事業) 子ども会や青少年の健全育成などの社会教育事業に関与することが多くなりましたか。			7. (奉仕活動) 廃品回収や清掃・消毒などの地域の奉仕活動に参加することが多くなりましたか。		
	かわらない	やや広がった	非常に広がった	かわらない	やや深まった	非常に深まった	かわらない	やや多くなった	非常に多くなった	かわらない	やや多くなった	非常に多くなった	かわらない	やや多くなった	非常に多くなった	かわらない	やや多くなった	非常に多くなった			
A. 近隣型 N=1038	10.4	52.5	36.7	16.1	56.4	27.2	46.1	40.4	13.2	23.4	51.6	24.6	43.1	42.8	13.7	58.1	32.1	9.4	64.5	28.2	6.7
B. 広域型 N=178	30.3	53.4	15.7	43.3	46.6	9.6	66.3	29.2	3.9	55.6	28.7	15.2	72.5	21.9	5.1	72.5	24.7	2.2	82.6	16.3	0.6
C. 職域型 N=177	46.3	37.3	15.8	53.7	35.6	10.2	73.4	24.3	1.7	59.9	29.9	9.6	79.1	18.1	1.7	82.5	13.0	3.4	81.9	15.8	1.1
計 N=1393	17.5	50.7	31.4	24.3	52.5	22.8	52.1	36.9	10.6	32.2	45.9	21.5	51.4	37.0	11.1	63.0	28.7	7.8	69.1	25.1	5.2

\*\*\* $\sqrt{Cr}=0.50107$  \*\*\* $\sqrt{Cr}=0.57220$  \*\*\* $\sqrt{Cr}=0.39997$  \*\*\* $\sqrt{Cr}=0.55545$  \*\*\* $\sqrt{Cr}=0.45609$  \*\*\* $\sqrt{Cr}=0.37146$  \*\*\* $\sqrt{Cr}=0.35762$

域型では 69.1%，職域型では 53.1%となっており，多くのクラブ員がクラブ加入後近所の人たちとの交際範囲が広がったとしている。クラブタイプ別では，近隣型の数値が非常に高い。また，近所の人たちとの交際が「深まった」とするものは，近隣型では 83.6%，広域型では 56.2%，職域型では 45.8%で，多くのクラブ員がクラブ加入後近所の人たちとの交際が深まったとしている。クラブタイプ別では，近隣型の数値が非常に高い。以上，両項目ともクラブタイプ間に有意差のあることから，近隣型は広域型，職域型よりも近隣交流を強く促進していると思われる。

## ②クラブ員のコミュニティ活動

表5—②は5つのコミュニティ活動について，スポーツクラブ加入後クラブ員のコミュニティ活動への参加にどのような変化があったかを示したものである。

### 〔町内会の会合への出席〕

スポーツクラブ加入後，町内会の会合への出席が「多くなった」（「やや多くなった」と「非常に多くなった」を合わせたもの，以下同じ）と回答したクラブ員は全体の 47.5%である。それをクラブタイプ別にみると，近隣型では 53.6%，広域型では 33.1%，職域型では 26.0%となっており，近隣型では「多くなった」とするものが顕著に高い。これに対して，広域型，職域型では「かわらない」とするものが，それぞれ 66.3%，73.4%と多い。クラブタイプ間に有意差があることから，近隣型は広域型，職域型よりも，町内会の会合への積極的参加を促進していると思われる。町内にスポーツクラブが結成されたことで，町内会の会合に男たちの出席が多くなったという事例が予備調査の段階で各地で報告されたが，この数字はそれを裏づけている。スポーツに直接関連のないコミュニティ活動の一つである町内会の会合への関与がクラブ加入によって促進されていることは注目されてよい。スポーツクラブ活動を通して近隣交流が深まり，町内会に出席しやすい状況が作り出されていると考えられる。

### 〔地域スポーツ行事への参加〕

スポーツクラブ加入後，地域スポーツ行事への

参加が「多くなった」と回答したクラブ員は全体の 67.4%である。それをクラブタイプ別にみると，近隣型では 76.2%，広域型では 43.9%，職域型では 39.5%となっており，近隣型では「多くなった」とするものが顕著に高い。これに対して，広域型，職域型では「かわらない」とするものがそれぞれ 55.6%，59.9%と多い。クラブタイプ間に有意差があることから，近隣型は広域型，職域型よりも地域スポーツ行事への積極的参加を促進していると思われる。

### 〔地域祭典行事，青少年の育成事業，奉仕活動への参加〕

スポーツクラブ加入後，地域祭典行事への参加が「多くなった」と回答したクラブ員は全体の 48.1%である。これをクラブタイプ別にみると，近隣型では 56.5%，広域型では 27.0%，職域型では 19.8%である。また，青少年の育成事業への参加が「多くなった」と回答したクラブ員は全体の 36.5%であり，これをクラブタイプ別にみると，近隣型では 41.5%，広域型では 26.9%，職域型では 16.4%である。さらに，奉仕活動への参加が「多くなった」と回答したクラブ員は全体の 30.3%であり，これをクラブタイプ別にみると，近隣型では 34.9%，広域型では 16.9%，職域型では 16.9%である。以上，いずれもクラブタイプ間に有意差がみられることから，近隣型がこれらの3つのコミュニティ活動への参加に与える促進的効果は，広域型と職域型よりは強いと思われる。

以上，クラブ加入がクラブ員のコミュニティ活動におよぼす効果を参加頻度の変化からみてきたが，その結果，近隣型は広隣型，職域型よりもクラブ員のコミュニティ活動への参加を強く促進していると思われる。

### (3) コミュニティ活動に対する地域住民の協力

スポーツクラブが町内や地区に結成されることはスポーツに直接参加しない人たちに対してもさまざまな波及効果をもたらす。たとえば，地域の人たちのスポーツに対する関心の高まりやスポーツを通しての家族ぐるみの交際，町内の人たちの親交の深まりなど，コミュニティ活動に対する地



表6 コミュニティ活動に対する地域住民の協力

%

	1.(地域スポーツ行事) 体育祭、運動会、スポーツ大会への協力					2.(町内会の会合) 町内会・自治会の会合(寄合)への協力					3.(地域祭典行事) 祭礼・盆踊りへの協力					4.(青少年の健全育成) 子ども会・青少年の健全育成事業への協力					5.(奉仕活動) 清掃・消毒などの奉仕活動への協力				
	非常に悪くなった	やや悪くなった	かわらない	ややよくなった	非常によくなった	非常に悪くなった	やや悪くなった	かわらない	ややよくなった	非常によくなった	非常に悪くなった	やや悪くなった	かわらない	ややよくなった	非常によくなった	非常に悪くなった	やや悪くなった	かわらない	ややよくなった	非常によくなった					
A.近隣型 N=1038	0.4	1.3	29.7	47.0	20.9	0.0	1.0	51.5	36.7	9.9	0.0	0.9	51.1	32.5	14.7	0.1	0.6	45.8	40.1	12.7	0.3	0.7	64.8	26.7	6.6
B.広域型 N=178	0.0	0.6	64.0	29.8	3.9	0.6	0.6	72.5	23.0	2.2	0.0	1.1	76.4	18.0	3.4	0.0	0.0	70.2	24.2	4.5	0.0	0.6	87.1	9.6	1.7
C.職域型 N=177	0.6	1.1	70.1	20.3	5.6	0.0	0.0	78.0	18.6	1.1	0.0	1.1	81.9	11.9	2.8	0.6	1.7	78.5	12.4	4.5	0.0	0.6	81.9	14.7	0.6
計 N=1393	0.4	1.1	39.2	41.4	16.8	0.1	0.8	57.6	32.7	7.8	0.0	0.9	58.2	28.0	11.8	0.1	0.6	53.1	34.5	10.6	0.2	0.6	69.8	23.0	5.2
	*** $\sqrt{Cr}=0.49953$					*** $\sqrt{Cr}=0.48293$					*** $\sqrt{Cr}=0.43394$					*** $\sqrt{Cr}=0.44287$					*** $\sqrt{Cr}=0.37972$				

域住民の態度にも変化をもたらす。表6は地域にスポーツクラブが結成されたことによって、コミュニティ活動に対する地域住民の態度が、どのように変化したかをクラブ員の反応からみたものである。クラブ結成後、コミュニティ活動に対する地域住民の態度が「よくなった」「ややよくなった」と「非常によくなった」を合わせたもの、以下同じ)と回答したものだけに限定してみると、全体では、地域スポーツ行事では58.2%、町内会の会合では40.5%、地域祭典行事では39.8%、青少年の育成事業では45.1%、奉仕活動では28.2%である。最も高い数値は地域スポーツ行事への協力である。

これをクラブタイプ別にみると、クラブ結成後地域スポーツ行事に対する住民の態度が「よくなった」とするものが、近隣型では67.9%と高い数値であるが、広域型では33.7%、職域型では25.9%と低い。クラブタイプ間に有意差があることから、近隣型は広域型、職域型よりも住民の地域スポーツ行事に対する協力的態度を引き出すのに効果的に機能していると思われる。このような傾向は他の4つのコミュニティ活動に関しても同様に見られ、いずれもクラブタイプ間に有意差があることから、近隣型は広域型、職域型よりも地域住民のコミュニティ活動に対する協力的態度を

促進、強化していると思われる。

### 3 コミュニティ意識

コミュニティ活動のほかに、地域づくり、町づくりにとって大切な条件はコミュニティ意識の形成である。鈴木広はコミュニティ意識をコミュニティ・モラルとコミュニティ・ノルムに分けられる<sup>7)</sup>としているが、この方法によって、クラブ員のコミュニティ意識をみた。近隣型のような居住地が近接したクラブ員のコミュニティ意識は広域型、職域型とは異った傾向を示すのであろうか。次にこの点を検討してみよう。

#### (1) コミュニティ・モラル

鈴木はコミュニティ・モラルを次のように規定している。「コミュニティ・モラルは人びとのコミュニティに対する関与の程度を知るための概念装置である。これはコミュニティ意識の大きさをあらわすものであり、したがって、コミュニティ・モラルの高いほどコミュニティ形成にとってのぞましいといえる。コミュニティ・モラルは、感情、統合認知、参加意欲の3要素からなりたつと考えられる。感情は、愛着感、同一感、安心感、満足感などといった感情の水準を問うものである。統合認知は、コミュニティのまとまりについての評価である。参加意欲は参加意志、役

割意識，使命感，達成要求などコミュニティに関する関与の強さである。」このようなコミュニティ・モラルは，一定の地域的範囲のなかでスポーツ活動が展開されることによって呼び醒まされたり，あるいは強化されるものと考えられる。そこで，次にクラブタイプ別に，コミュニティ・モラルの特徴をみることにする。

表7に示すように，結論的にいえば，近隣型のコミュニティ・モラルは広域型，職域型よりも有意に高いという結果が得られた。すなわち，感情についてみると，「われわれ意識」と「好き嫌い」の両項目においてクラブタイプ間に有意差がみられ，近隣型の感情面でのコミュニティ・モラルは有意に高かった。このことから，地域への愛着・関心などの共属感情は広域型，職域型よりも近隣型において高められると思われる。また，参加意欲についてみると，「コミュニティ行事への参加」と「役割意識」の両項目においてクラブタイプ間に有意差がみられ，近隣型の参加意欲面でのコミュニティ・モラルは有意に高かった。地域のコミュニティ活動に積極的に参加したり，町のために役立ちたいという参加意欲は広域型，職域型よりも近隣型において高められると思われる。ま

た，統合認知についてみると，「依存意識」の項目においてはクラブタイプ間に有意差がみられたが，「コミュニティのまとまり」の項目ではクラブタイプ間に有意差はみられなかった。統合認知のような評価のコミュニティ・モラルに対してはクラブタイプはあまり関係ないと思われる。

このように，郷土愛的地域連帯とか地域同一化感情などといった地域愛着度をあらわす感情面と，スポーツ大会，祭礼，清掃などの地域行事への参加意欲面では，コミュニティ・モラルが近隣型に高いことがみとめられた。このことから，近隣型のような居住地が近接した人たちが構成されたクラブはコミュニティ・モラルを高めるのに効果的であると思われる。コミュニティ意識の重要な要素であるコミュニティ・モラルが高まることはコミュニティ形成にとってのぞましいといえる。しかし，このようなコミュニティ・モラルがそのままのぞましいコミュニティ形成に向うとは限らない。地域エゴとしての士気は高いが規範としては望ましくないというコミュニティ意識が形成される可能性がある。そこで，コミュニティ・モラルを方向づける規範意識が問題となる。次に，クラブ員のコミュニティ・ノルムを検討してみよう。

表7 コミュニティ・モラル

	1. (感情—われわれ意識) この町の人たちはみんな仲間だという感じがしますか。					2. (感情—好き嫌い) あなたはこの地域(町内や地区)が好きですか。					3. (参加意欲—コミュニティ行事への参加) 町内や地区で一諸にする行事(体育祭・祭礼・盆踊、清掃など)にあなあなたは参加する方ですか。					4. (参加意欲—役割意識) この町のためになることをして何かをしたいと思いますか。				5. (統合認知—コミュニティのまとまり) この町の人たちのまとまりはいい方だと思いますか。				6. (統合認知—依存意識) この地域に住んでいる人はお互いに何かとお世話しあっていると思いますか。					
	思われない	ほとんど思われない	あまり思われない	まあそう思う	そう思う	非常に嫌い	やや嫌い	やや好き	非常に好き	ない	ほとんど参加しない	あまり参加しない	ある程度参加する	よく参加する	ほとんど思わない	あまり思わない	ある程度思う	そう思う	非常に悪い	やや悪い	まあよい	非常によい	ほとんど思わない	あまり思わない	ある程度思う	そう思う	非常に悪い	やや悪い	まあよい
A.近隣型 N=1038	3.6	36.3	46.9	12.5	0.7	6.1	60.8	31.5	4.3	9.8	52.6	32.6	3.0	21.3	35.9	15.9	3.5	17.5	70.5	7.6	1.8	25.6	59.9	11.9					
B.広域型 N=178	9.6	41.6	42.7	6.2	2.2	10.1	67.4	20.2	19.1	24.2	44.9	11.8	7.9	28.7	58.4	5.1	6.2	15.2	74.2	3.4	5.6	32.6	57.3	4.5					
C.職域型 N=177	6.8	45.2	41.8	5.6	3.4	13.0	60.5	21.5	20.3	21.5	41.2	16.4	8.5	32.2	48.0	10.7	4.5	18.6	70.1	5.1	5.1	32.2	55.4	5.6					
計 N=1393	4.7	38.1	45.7	10.8	1.2	7.5	61.6	28.8	8.3	13.1	50.2	27.9	4.3	23.6	57.6	13.9	3.9	17.4	70.9	6.7	2.7	27.4	59.0	10.2					

\*\*\*√Cr=0.32062

\*\*\*√Cr=0.33356

\*\*√Cr=0.46166

\*\*√Cr=0.35467

n.s.

\*\*\*√Cr=0.32147

(2) コミュニティ・ノルム

コミュニティ・ノルムはコミュニティの価値を反映するもので、それはコミュニティの規範意識であって、コミュニティ意識の内容をあらわすものである。そして、コミュニティ文化に規定されつつ、人びとの生活と行動を条件づけるものであるとされている。すなわち、のぞましいコミュニティの方向づけを問うものである。鈴木はコミュニティ・ノルムを〈主体—客体〉、〈平準—格差〉、〈開放—閉鎖〉の3要素によって把握できるとして、次のように説明している<sup>8)</sup>。

〈主体—客体〉は、当該コミュニティに対する主体的かつ積極的な関与を方向づけるものであるかどうかを問うものである。このような主体的関与を欠いた態度はコミュニティ形成の力とはならない。

〈平準—格差〉は、他のコミュニティと交流し、連帯しうる価値を共有するかどうかを問うのである。自分の住む地域と他の地域との関係において、自分の住む地域が優先か困った問題のある地域を優先するかを問題とするものである。

〈開放—閉鎖〉は、コミュニティを改善する場

合の戦略をどこからはじめるかによって方法的全体主義か方法的地域主義かを問うものである。すなわち、地元と日本全体との関係において、地元中心か日本全体かを問うものである。

この方法によって、クラブ員のコミュニティ・ノルムを調査した結果を表8に示した。全体としてみた場合には、〈主体—客体〉では主体志向が60.3%とかなり高い。すなわち、スポーツクラブの人たちはコミュニティに主体的、積極的に関与するものが多く、この面ではコミュニティ形成にとってのぞましいといえる。しかし、〈平準—格差〉では格差志向が57.0%で半数を超え、地域間格差を容認する地元利益中心主義の傾向が多くみられ、また、〈開放—閉鎖〉では閉鎖志向が74.5%と非常に高い。このことはスポーツクラブ員が格差的、閉鎖的であって、地域に特殊にかかわろうとする地域エゴ、地元志向の傾向が強いことを示しており、のぞましいあり方が主体的で平準的で開放的な規範意識だとするならば、この結果はのぞましいコミュニティ意識であるとはいえない。

次に、コミュニティ・ノルムをクラブタイプ別

表8 コミュニティ・ノルム

%

	1. 主体—客体				2. 平準—格差				3. 開放—閉鎖			
	甲に近い	やや甲に近い	やや乙に近い	乙に近い	甲に近い	やや甲に近い	やや乙に近い	乙に近い	甲に近い	やや甲に近い	やや乙に近い	乙に近い
A. 近隣型 N=1038	26.1	36.6	28.1	8.9	8.0	32.4	47.4	11.5	8.5	15.7	43.0	32.3
B. 広域型 N=178	16.3	41.0	30.3	11.8	6.7	40.4	41.0	11.2	6.2	21.9	45.5	25.8
C. 職域型 N=177	18.1	31.1	35.6	14.1	11.9	35.0	41.8	9.0	9.0	15.8	46.3	27.1
計 N=1393	23.8	36.5	28.6	9.9	8.3	33.7	45.9	11.1	8.3	16.5	43.7	30.8

※※  $\sqrt{Cr}=0.28964$

N.S.

N.S.

にみると、〈主体—客体〉では主体志向が近隣型62.7%、広域型57.3%、職域型49.2%となっており、近隣型に主体志向が高く、主体的にコミュニティに関与する態度は広域型、職域型よりも近隣型において高められると思われる。しかし、コミュニティの価値や方向性を問う〈平準—格差〉と〈開放—閉鎖〉ではクラブタイプ間に有意差はみられなかった。

以上、スポーツクラブ員のコミュニティ意識をみた結果、コミュニティ・モラルの面では近隣型と広域型、職域型の間には有意差がみられ、近隣型が最も高かった。一方、コミュニティ・ノルムの面では、〈平準—格差〉と〈開放—閉鎖〉の両方においてクラブタイプ間には有意差はみとめられなかった。このことから次のことが示唆される。一つは郷土愛的な地域連帯とか地域同一化感情などいわば地域愛着度をあらわす感情面と、コミュニティ活動への参加、役割意識などの参加意欲面とに関係したコミュニティ意識（コミュニティ・モラル）の形成には、近隣型のような居住地が近いという条件が効果的に働くということ、他の一つは単に居住地が近いというだけでは、コミュニティをどの方向につくりあげていくかといった、いわばコミュニティの価値や規範に関係したコミュニティ意識（コミュニティ・ノルム）の形成は期待できないこと。端的にいえば、居住地が近いというという単なる地理的条件だけでは、のぞましいコミュニティの方向を決定づけるような意識の形成は困難であると思われる。

## 要 約

以上、地域社会におけるスポーツクラブがコミュニティ形成にどのようにかかわっているかを、I市の近隣型ソフトボールクラブのデータの分析を中心に、コミュニティ活動とコミュニティ意識の2つの側面から検討を試みた。その結果を要約すると、次の通りである。

1. 近隣型クラブは、クラブとして諸種のコミュニティ活動に積極的に協力していた。
2. 近隣型クラブは、諸種のコミュニティ活動に対する地域住民の協力的態度を促進していると

思われる。

3. 近隣型クラブの成員は、クラブ加入後近隣交流が密になった。

4. 近隣型クラブの成員は、クラブ加入後諸種のコミュニティ活動に積極的に参加していた。

5. 近隣型クラブの成員は、コミュニティ意識（コミュニティ・モラル）が高かった。

結論的には、

(1) 地域社会におけるスポーツクラブは、近隣交流、コミュニティ活動、コミュニティ意識を促進・強化することによって、コミュニティ形成の役割を果していること。

(2) 近隣型のような居住地の近い人たちでつくられたスポーツクラブはコミュニティ形成に強く機能すること、すなわち、領域性が地域社会におけるスポーツクラブのコミュニティ形成に重要な意味をもっていること、以上2つの仮説を検証することができたといえる。

## 結 語

コミュニティ・スポーツは、単に地域住民の個々人の身体活動を通しての健康、体力、楽しさ、よろこび等の追求に寄与するだけではなく、地域社会の連帯感を高め、福祉の拡大と人間性の回復を生活環境全体にまでおし広げていく契機となることを期待されるものである。その意味ではI市の近隣型ソフトボールクラブはコミュニティ・スポーツの典型であるといえる。同じ町内に住み、隣人で顔見知りでありながら、日常的には挨拶程度の会話に終始していた、地域の中核的担い手である30代、40代の男たちが、町内のソフトボールクラブ加入を契機に、スポーツを通しての親交を深め、交流が隣人を超えて地域社会の広範な人びとにまで広がり、しかもスポーツ活動だけにとどまるのではなく、祭礼、盆踊大会などの諸種のコミュニティ活動にまで関心の幅を広げ、地域への愛着感、われわれ感情、役割意識などが個々人の内に喚起される。地域のコミュニティ活動が活性化し、人びとはコミュニティ活動に参加することで、地域社会の諸問題への関心を高め、のぞましい町づくり、地域づくりに主体的に参加する態

度が形成され、生活環境全体を改善していくムーブメントにまで高められていく、というのが近隣型ソフトボールクラブへの期待であろう。

本研究の結果は、スポーツクラブによるコミュニティづくりには範域性が非常に重要な要素であり、近隣型のような居住地の近い人たちでつくられたクラブがきわめて効果的であることを示した。地域社会におけるスポーツ活動に参加することがコミュニティづくりに直結するものでは決していないということはいうまでもない。スポーツクラブはスポーツをすることが第一義であって、地域づくり、町づくりは第二義的なものと考えなくてはならない。しかし、地域社会のスポーツクラブはコミュニティを離れては存在しないし、のぞましいコミュニティのなかでこそ、のぞましいスポーツクラブは育つといえる。そのためにも、スポーツクラブは他のコミュニティ活動に積極的に参加することで、コミュニティづくりに主体的にかかわっていくことが要請される。近隣型のような居住地を基盤にしたクラブのコミュニティ活動への参加率が高く、しかもコミュニティ意識（コミュニティ・モラル）も高いという事実は、このようなスポーツクラブにはコミュニティ形成の潜在的エネルギーが豊富に内蔵されていることを示すものである。しかし、単に居住地が近いという地理的条件だけではのぞましいコミュニティの方向性を決定するような意識の形成がむづかしいとするならば、このエネルギーを新しいコミュニ

ティづくりにどのように方向づけていくかが今後の課題となろう。それはクラブ員自身の問題でもあるが、地域社会全体の課題でもある。

なお、本研究は、昭和56年度文部省科学研究費一般研究C：「地域社会におけるスポーツクラブの社会的機能」の研究の一部である。

#### 注1

本調査では、鈴木のコミュニティ・モラル尺度を用いた。感情では「われわれ意識」と「好き嫌い」、参加意欲では「コミュニティ行事への参加」と「役割意識」、統合認知では「コミュニティのまとまり」と「依存意識」である。

#### 参考文献

- 1) 国民生活審議会調査部会編「コミュニティ—生活の場における人間性の回復」, 1969.
- 2) 経済企画庁編「経済社会基本計画—活力ある福祉社会のために」 p59, 1973.
- 3) 経済企画庁編「コミュニティ・スポーツ施設整備計画調査報告書」 p14~18, 1974.
- 4) 松原治郎「コミュニティの社会学」東京大学出版会, p25~28, 1978.
- 5) 海老原 修「コミュニティ・スポーツの社会的機能について」レクリエーション研究 第8号, p50, 1980.
- 6) 鈴木 広「コミュニティ・モラルと社会移動の研究」, アカデミア出版会 p13~14, 1978.
- 7) 同上, p435~437
- 8) 同上, p437~439

(1983年2月8日受付)

